



パレスチナの「日本通り」。日本の支援を記念して名付けられた。

## Contents

- 02 目次  
プロローグ Vol. 16
- 04 特集 中東  
深まる日本との絆
- 05 信頼でつながる中東と日本  
文化遺産を地域の発展の一助に パレスチナ／イラン  
確かな絆で歴史を守る エジプト  
積み重ねた実績が信頼を生む日本企業 イラク
- 10 広がる連携の輪
- 12 誰もが安心して暮らせる社会へ  
シリアの未来を担う人材を育成 シリア  
安心安全な難民キャンプ生活を パレスチナ  
読書へのハードルを下げ学びを広げる エジプト
- 17 パワーあふれる若者たち  
適職に導くキャリアカウンセリング ヨルダン  
教育が拓く未来のイノベーション エジプト  
ITの力でガザ地区に雇用を パレスチナ  
若く優秀な人材を育てる! エジプト
- 20 中東のビジネスチャンス  
ビジネスを支える政策・制度、インフラを整備  
チュニジア／ヨルダン  
民間企業の力を生かす チュニジア／モロッコ／エジプト  
産官学連携でビジネスの芽を育てる チュニジア
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 15  
モロッコ
- 26 世界につながる教室⑧  
遊びから世界を学ぶ
- 28 地球ギャラリー Vol. 137 パキスタン・イスラム共和国  
写真・文 ● 鈴木 革 写真家  
谷に戻った笑顔
- 34 教えて! 外務省  
知っておきたい国際協力⑰
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol.17



パレスチナ自治区にあるオールド・アスカール難民キャンプ。住民がキャンプの運営に関わる(写真:阿部雄介)。



信頼で世界をつなぐ  
Leading the world with trust

# クルド自治区 と日本

文・安田菜津紀

プロローグ  
Vol. 16

イラク北部、クルド自治区に初めて足を踏み入れたのは、2016年初頭のことだった。夏は50℃近くにもなるこの地も、冬は一日を通して冷たい空気に覆われる。ちょうど雨季ということもあり、ほんのり緑に覆われた山々は、暖かな春がすぐそこまでやってきていることを思わせた。

主要都市であるアルビルでは、世界遺産にも登録された古めかしい城塞から、家族連れでにぎわう中心広場とスーク(市場)を見渡せる。アーケードの市場はまるで迷路のように枝分かれした細道が広がり、お菓子やコーヒー、装飾品まで、色とりどりの店を巡るのに夢中で時を忘れるほどだった。

何より印象的だったのは、人々の整然とした様子だった。街なかを歩いていても、珍しい外国人としてじろじろ見られることも、執拗にやじを飛ばされることもない。ただ、カフェでお茶をしていると、ときおり「あの、日本人ですか? よかったら一緒に写真を撮ってもいいですか?」と恥ずかしそうに声をかけてくる人がいる。その距離感がとても心地よかった。一方で、一度仲良くなれば、自宅に招かれ、お茶やご飯をご馳走になり、気がつけば泊めてくれる準備までできている、というほど人情に厚い人々に出会える。取材も大切な目的だが、こうした人々の温かさに触れることがうれしくて、私は何度となくこの地に足を運んできた。

このクルド自治区の中で、日本とのつながりを感じる街がある。自治区の中でも東端に位置するハラブジャ。中心地に広がる小さなマーケットでは人々がのんびりと行きかい、一見のどかな田舎の街並み、という印象を受ける。けれどもこの地は1988年、イラク軍によって投下された化学兵器により5000人もの命が奪われた場所とされる。誰しもが家族を亡くし、「まるで街全体が孤児院のようだった」と、当時を生き延びた男性が語っ



イラスト●中村知史

ていた。

実はハラブジャ市内には、「広島通り」と呼ばれる道がある。「ハラブジャからヒロシマへの祈りを伝えよう」と、3年ほど前に人々がそう名づけたそうだ。8月には毎年のように、日本に向けた祈りの集いを開いている。私が取材をさせてもらった住人の一人で、87歳になるカカ・シェイフさんがこう語る。「ハラブジャから日本に祈っているように、日本からもハラブジャに祈ってほしい。こうして輪を広げ、友が増えれば、自然と敵も減っていくのではないだろうか。彼らが祈るのと同じくらい、私たちは日本から彼らの平和を祈ることができているだろうか——そう考えずにはいられなかった。

2020年の幕開けとともに、このイラクを舞台にアメリカとイランの両国が緊張を高めた。クルド自治区のアルビルにさえ、米軍関係施設を狙ったものとみられるミサイルが着弾した。これに伴い日本の外務省は、クルド自治区を含むイラク全土の危険レベルを「退避勧告」に引き上げた。平時のクルド自治区は治安面で安定しているがゆえに、隣国シリアからも同じイラク国内からも多くの避難者を受け入れてきた地でもある。この危機によって退去を余儀なくされた日本の人道支援の関係者にとっては、そうした地にいる人々を残して帰国せざるを得ないのは無念だったはずだ。

いつかこの地がふたたび落ち着きを取り戻し、多くの人々がこの地の魅力や、歩んできた歴史に触れる機会が訪れることを願う。

安田菜津紀(やすだ・なつき)  
1987年、神奈川県生まれ。上智大学卒業。NPO法人Dialogue for People(ダイアローグフォーピープル/D4P)所属フォトジャーナリスト、同団体の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材したのを機に、現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。著書に「写真で伝える仕事-世界の子どもたちと向き合って-」(日本写真企画)ほか。現在、TBSテレビ「サンデーモーニング」にコメンテーターとして出演中。